

科学技術の潮流

JST 研究開発戦略センター

②1

深層学習の限界

人工知能（AI）は私たちの日常に浸透してきた。スマホアプリや自動運転車、企業の業務AI化、さらには遠くない将来、AIの発展が人間の知性を超えた時点で社会に大きな変化が起ると、いわゆる「シンギュラリティ」への危機感が世間をにぎわせるなど、話題は尽きない。

プライバシー保護や公平性などAI開発がもたらす倫理的課題とともに、技術的に超えるべき高いハードルもある。人間の知的活動

深層学習は特徴を処理するためにまだ膨大なデータを要する。深層学習の源流は、1970年代に情報科学者の福島邦彦博士が

の大部分をAIで置き換えるとしても、現在のAIの原動力であるディープラーニング（深層学習）だけでは、深層学習の限界が

若い頭脳を育成

学を含む脳科学を専門に学ぶ学部・研究科が多く設置されている。わが国はこの独創的発想から創出される可能性がある。わが国が脳科学と情報科学を修めた若い頭脳を積極的に育成してゆけば、次世代AI開発の育成では欧米の後塵を拝している。

（金曜日掲載）

次世代 AI 開発 脳・情報科学を融合



科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター フェロー（ライフサイエンス・臨床医学ユニット） 井上 貴文
大阪大学大学院医学研究科博士課程修了。東京大学助手・助教を経て現在、早稲田大学教授。神経科学分野の研究を行う傍ら、調査・政策提言活動にも携わる。博士（医学）。

脳科学と情報科学の融合が、次世代 AI 開発の突破口に

